



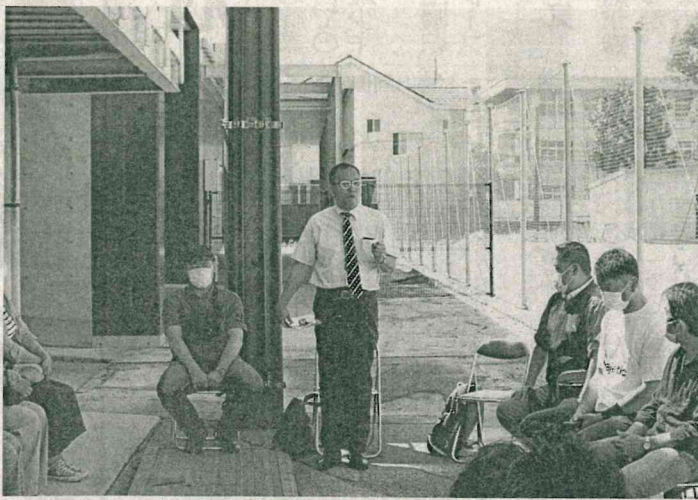
練習再開に向けて

センバツに続き、夏の甲子園の中止が決定し、広島県では独自の大会開催が模索されているが、大半の高校では現在チーム練習ができておらず、春の人事異動で赴任してきた監督は、選手の特徴やチーム力をまだ把握できていない状況だ。27年ぶりに母校・海田に復帰した平崎直樹監督(54)もその一人。部員に接したのはわずか7日間。7人の1年生のうち4人は入部届を出した日に練習中止となり、一度も指導できていない。現状でいかに選手の意欲を維持するかに苦心する。

休校になる前の4月中旬、野球に関する本を選手に貸し出した。休校後は「グーグルアプリ」が、大半の高校では現在は「スルーム」を使って、野球技術のほか、応援されるチームになるための考え方や、時間管理、あいさつ、勉強との両立などの課題を与え、選手と意見交換している。

目標は文武両道。野球部員である前に、進学校の間、海田高校生であれ、と唱える。前任校の広でも実践した。広の直近3年間の野球部員の国公立大進学率は60%。広島大や大阪大、九州大に合格し、多くが大学でも野球

チーム力把握 新監督の苦勞



「3密」を避けるため屋外で開かれた海田高校野球部の保護者会

を続けている。海田でもその数字を求める。練習が無いこの時期は、練習環境改善に目を配る。ネットの補修、グラウンド状態を良くするための機材の手配、ピッチングマシンの追加導入。安全で良い練習ができる状態をつくり再開を

海田は過去に2度、県でベスト4に進出した。1999(平成11)年夏は準々決勝で強豪広陵に負けた。2004(平成16)年秋には、準決勝で準決勝で熱戦を演じている。

近年上位進出のない海田復活に期待も大きい。5月17日であった保護者会では、海田で3年間平崎監督の指導を受け、法政大まで野球を続けたOB会長の小島大輔さん(44)が「現役が頑張れば、OB会も盛り上がる。勝ち上がるチームになってほしい」。保護者会長の中森日吉さん(46)は「(3年生の)息子も目標を決め、日々自主練習している。練習再開を心待ちしている」と、平崎監督の指導に期待する。

平崎監督は前任の広でも、その前の呉宮原でも、チームを何度もベスト4以上まで勝ち上げさせ、21世紀枠の県推薦校や中国地区候補、春・秋の中国大会進出まで導いた。「教員生活最後は、母校で指導したかった」という言葉に並々ならぬ意欲がうかがえた。